

荻原神社のお船祭り

- ◆伝承地 / 安曇野市明科七貴荻原 荻原神社
- ◆実施日、上演日、開催日等の期日 / (新暦)10月9日(日)・10日(月)
- ◆無形民俗文化財が行われる祭りや行事等の名称 / 荻原神社の秋の例大祭
- ◆実施場所 / 荻原神社

由来

- ①祭日はかつて9月11日であったが後に10月11日になり、現在は10月第2月曜日「体育の日」に行っている。
- ②大正初年にお舟が火事で焼失、出さない年もあった。
- ③昭和6、7年頃、鉢ヶ沢、高鼻沢、宮沢川が大雨の度に土石流となり、五ヶ用水を埋めるなど大きな災害があった。この五ヶ用水の工事の際、工事費負担の問題から耕地内に争いが生じ十余年間はお祭りができなかった。
- ④終戦直後、青年会が中心となってようやく和解放し、以来、盛大な祭りが若貴連によって行われる。華が予想外にあがったときは夜昼二日間芝居(沢村一座)をしたことが何年もある。
- ⑤終戦前後から昭和30年代にかけて若貴連(18～29歳)の人数は40～50人前後であり、舟造り、花道造り、飾り物造り等と分担して仕事をすすめる。その年初めて参加した新人は芝居の役者のための風呂炊きも大事な役目である。
- ⑥戦後宵祭りのローソクが不足したとき、バッテリーを使って舟の明かりを取っている。舟は、当時、公民館からお宮まで約150mの道のりを上げるのに2時間以上もかかった。舟が大きく、道も舗装してないので土手に落としてしまったことがある。
- ⑦昭和45年頃、高度成長期、若者祭りができなかったのが宮沢川を境として沢南、沢北が交代で舟造りをして祭りを続ける。
- ⑧平成の初め頃は祭典行事の主体となった若貴連の活動が活発で、近隣にも誇れる大きな舟を造り、華やかな人形飾りで、宵祭りは

百数十本のローソクが灯り、年々、内外の見物客でにぎやかな祭りが続く。

- ⑨平成の初期の頃から祭りの中心となる若貴連のメンバーの減少が目立つようになり、度々、耕地の問題として提起される。
- ⑩平成11年(1999)、若貴連が解散される。秋の例大祭は明治時代から続く若者による伝統行事であるが学生や就職者など年々メンバーが減少、10数名となり活動の存続が困難となる。
- ⑪平成12年(2000)、秋祭り実行委員会が結成され活動を始め、現在に至っている。
- ⑫平成14年(2002)の秋祭りには五色の幕が新調され、大きな舟が一段と引き立ち、舟飾りの武者人形(デク)が鮮やかである。この年の飾りは明智光秀の家臣と織田信長の小姓森蘭丸が対決する「本能寺の変」の場面である。境内の2本の幟も新調される。
- ⑬平成14年「浦安の舞」が40年振りに復活する。衣装は一部新調、他は旧七貴村の4つの神社で使用されたものを活用する。以前は12才の女兒が舞ったが今は小4～6年女子による。9月下旬から練習、女子9名が宵祭り、本祭りに分かれて前宮で舞う。

概要

- ①昭和10年頃まではお舟は大小各一艘(全長10m 超と4m)が出ていたが、現在は大きいお舟のみ。
- ②舟は内輪四輪、六本柱のやぐらを造り、両側に芻木(はねぎ)を伸ばして両端をU字型に結び、前後部の張り出しはナラと竹を使って作るが前後の形が異なり、舳先端のオトコバラより艦側のオンナバラの張りを大きくする。オンナバラ

上部には「コドモ」と呼ぶ張り出しを作る。

- ③お船の周囲には五色の幕を張り、舟縁には杉葉を豊富に付け、蚊帳などで背景を作り、デク(人形)を飾りつける。平成23年の人形飾りは歴史上の名場面で、今川方にあつて敵将を打ち取る若干18才、藤吉郎のめざましい活躍「木下藤吉郎 富士川の初陣」である。製作は9月初めに始まり宵祭りの午前中には舟上に飾られる。
- ④人形「藤吉郎」の着ける鎧兜は昭和初年に松代町(現長野市)の武家から購入、年々登場人物に使用され大切に保管されている。
- ⑤お船は市内有数の大きさを誇り、舟造りには一段と力が入る。縛り縄は1チーム4名、2本の太縄を手際よくよっていく。部材の縛り縄は何重にも巻き上げる。舳先と艫先につけるナラの木は、径10cm余、2本頭を合わせ縄で入念に巻く。この取り付けがむずかしく、形よく男女の腹部を再現する技術は高い。刎木の長さで舟の大きさが決まるが、今年は全長17m余、高さ6.5m、巾4mとかなり大きく出来る。
- ⑥宵祭りに公民館からお宮に曳かれたお舟は本祭りの午後に一旦公民館まで降され、本祭りには再度お宮まで曳かれる。宵祭りのお舟には150本余りのローソクが灯され、舟上に人形飾りが浮び、にぎやかなお囃子が祭りを一層盛り上げている。
- ⑦境内に入ったお舟は右回りに一回転され、緩やかな斜面上、拝殿に向い左端に止められる。
- ⑧今年の秋祭り実行委員会の活動も定着し、安曇野有数の大きさを誇る舟をにぎやかに曳行する。公民館から神社への150m程の道のりは短い为上り坂でカーブもあり1時間半もかけて上る。大型の舟は道中激しく前後にあおられて壮観である。

伝承組織

保存会名 / 荻原神社秋祭り実行委員会
所在地 / 安曇野市七貴荻原

代表者名 / 区長 原 宗弘(平成23年度)

伝承組織の現状

- ①明治以降、祭りを盛り上げるため、舟造り、人形造り、曳行、演芸等を仕切る団体として若貴連が結成される。18才から29才までの男子で組織され年嵩の者が年番長を勤める。メンバーは50名余で活動。
- ②昭和初期、災害や地区内の諸問題などで祭りが中断、戦後は従来のように若貴連が中心となって運営される。
- ③昭和45年頃、高度成長期、若者がそろわず祭りが出来ない状況の年がある。その時は宮沢川を境として沢南、沢北が交代で舟造りをし、耕地住民が協力し合ってお祭りを続ける。
- ④昭和末期、若貴連のメンバーの減少が目立つようになり、特に高・大学生の年代で祭りの参加が困難となり、その存在が危ぶまれる。
- ⑤平成時代になると若貴連メンバーが10数人に減少、祭りの運営が困難となり解散する。昔からの伝統を次代に引き継げるよう平成12年に秋祭り実行委員会が主体となって運営に当る。
- ⑥実行委員会は区長が中心となり毎年組織される。経験など考慮され夫々分担し活動する。グループは舟造り、宮造り、飾り物造り、囃子太鼓、催し物余興、秋祭り資金会計、花造り、浦安の舞(協力消防団、安協)である。

文化財価値についての特徴・所見

- ①綿密な実行委員会の計画により、各分担の仕事が責任者のもとに積極的に行われる。大型舟造りには誇りを持って仕事に当たっている。以前には全長20m余のお舟が造られたが安協の指導もあり、刎木の先端部1.5mを切断してお舟の全長を17m余に縮小した。現在でも宵祭り、本祭りの曳行がにぎやかに実施される。
- ②秋祭り実行委員会が活動の中心となるが“住民みんなで作る秋祭り”という意識が非常に

高い。準備作業(一週間前から)など率先して出て仕事をする。各々が内容、手順などよく理解されている。実行委員会の活動が定着、一人一人が積極的に行動し若いリーダーが育っている。

- ③宵祭り、百数十本のローソクのゆらめきが叢林の闇に輝き、数体の武者人形の歴史的な名場面が浮ぶ。昔からの伝統を守り、にぎやかな“ローソク祭り”を住民みんなで盛り上げ楽しむ姿である。
- ④お舟のヤグラは6本柱の直方体である。安曇野市のヤグラは4本柱の立方体が主流である。お舟のルーツといわれる諏訪大社下社のお舟は6本柱による立方体のヤグラである。ヤグラの基礎部分はしっかり作られる。ヤグラには刎木・腕木を頑強に取り付ける。
- ⑤ハラを中心部の太いナラの木はハラの形を整えるだけでなく、重要な舟材(柴)であり神の乗り物としての船が依(より)代(しろ)になるためのものである。宵祭りのお舟が出発して間もなく激しく上下にあおるのは神霊を呼び込み、舟を依代とする大事な行為である。
- ⑥ハラ縁に他地区より多くの杉の葉(柴、軽トラック5台分)を飾る。特筆すべきことである。
- ⑦オンナハラ先端部に柴を盛り上げ、その上に黄・赤の布を掛けコドモを作る。これは子孫繁栄五穀豊穡を願う表れである。他地区では見られない。
- ⑧ハラ底まで幕を張り卵型にする。他地区の舟は底まで幕を張ることはない。
- ⑨人形は荻原区で造り、毎年歴史上の有名な場面を変えて製作する。ヤマの部分に飾り物をするのは安曇野市の舟だけである。北安、四賀村等他地区の舟には飾り物はない。穂高神社の影響が大きい。製作には1ヶ月、キャリア10年の専属者5名あたり、その技術は高い。
- ⑩薄すきを用いる。諏訪大社系の神社では薄は祭具の一つであり、祭りには欠かせないものである。
- ⑪祭りが終わると舟を解体するのは、神に帰っ

ていただくためである。神の乗り物である舟を解体するので舟の意味が無くなる。

記録類

文書記録	なし
映像記録	山崎 今朝登(市民タイムス製作)
録音記録	山崎 今朝登(市民タイムス製作)

◆参考文献

- 明科町史編纂会 1984 『明科町史』 明科町史刊行会
- 三田村佳子 2009 『風流としてのオフネ』 信濃毎日新聞社

調査

調査日	平成23年10月2日(日) 平成23年10月8日(土)～10日(月)
調査者	西牧尚人、山越正義
調査表作成	山越正義、西牧尚人